

プラトーンに於ける知識への道

——「テヘアエテイツス」研究——

長 澤 信 壽

一

プラトーンの多くの對話篇に於ける哲學的思索の跡を、その發展の過程に従つて辿らうとする時、我々が先づ第一に遭遇する困難は、それらの對話篇が書かれた年代並に順序の問題であらう。幸に、キヤムベル、ルトスワウスキー等によつて文體の研究が始められて以來、大多數の對話篇に就いては、略々著述時代並に順序に、學說の一致を見るようになった。そこで我々は彼の對話篇を前後の二期に大別して考察することが出来るであらう。而して前期は所謂「ソークラテース的對話篇」に始まつて「國家」若しくは「ブハイドルス」に至り、後期は「テヘアエテイツス」、「バルメニデース」に始まつて「諸法」に終るものである。今此の前後二期の對話篇の内容を最も簡單に要約して、我々は前期の特徴を倫理的・實踐的、後期の特徴をそれに對して、自然學的形而上

學的と呼ぶことが出来るであらう。^(二)此の特徴づけは、固より、夫々そこに見られる思想の傾向を概略的に示したまでであつて、こゝに言ふ後期の諸對話篇には倫理的思想が見られず、前期の其れ等には形而上學的傾向がないと言ふのではない。

(一)「プハイドルス」が前期に入るべきものか、後期に入るべきものか、またいつ書かれたかは、たしかに一つの問題である。今は暫定的に前期の、おそらく「國家」の後に書かれたものとしておく。

(二)此のやうに特徴づける點に於て、私はシュテンツェルが、前期に於けるプラトーンの關心が主として「倫理的實踐的領域」に、後期に於ける夫れが「理論的自然哲學的領域」にあつたとする考に一致する(Studien zur Entwicklung der platonischen Dialektik, 2 te Aufl. S. 17)。

このやうにプラトーンの對話篇を前後二期に分つて考察することゝ關連して、爰に、プラトーンによつて描かれたソークラテース像の史實性の問題が起る。此の問題を追及してゆくことは極めて重要な、また興味深いことではあるが、今、私が研究しようとするプラトーンに於ける知識の問題とは直接關係がないから省略することとする。そして私はプラトーンが、カントと同様に中年以後に於て自己の考へに達した人であるにもせよ、またさうではないにもせよ、或はプラトーンがその師に就いて^(一)報告してゐるものが「史實」であるにもせよ、^(二)變貌であるにもせよ彼の對話篇を貫いてゐる一つの精神は、ソークラテース的プラトーンの共有財産として見る事が出

來ると思ふ。

(11)

(1) A. E. Taylor, *Socrates*, p. 30.

(1) *Ibid.*, p. 32 f.

(三) ハリカルナッスス(Halicarnassus)のディオニージオス(Dionysius)によれば(Comp. verb., 25)プラトーンは八十歳に至るまで絶えず自分の著作を見返して、訂正してゐたと言ふ。それ故にロチエはこのことよりしてプラトーンの著作年代を決定することを断念してゐる(Cf. Rodier, *Études de philosophie grecque*, p. 57 et not. 2)。しかし私は決して著作年代の問題も、ソークラテース像の問題も、断念せられてよいと言ふのではない。最近ロス教授によつてなされた講演「The Problem of Socrates」(Proceeding of the Classical Association, vol. XXX, pp. 8—24、本誌第二百二十一號に服部氏が抄譯されてゐる)、バアネット・テイラーの學說に對する優れた批評であると共に、ソークラテース問題の極めて穩健な主張であらう。

「國家」が書かれてから「テヘアエテーツス」に至るまでには、約二十年間の間隔があつたらしい。(1) 此の二十年近い間に、プラトーンは「ブハイドルス」二篇を書いたほか、全く著述をすることなく、全力を彼が設立したアカデメイアの基礎を強固にすることに集注したものだと思はれる。彼が再び筆を取つた時、その對話篇は、我々外國人が貧弱な希臘語の知識を以つて讀んでさへ氣がつく程、初期の對話篇とは性格を異にしたものとなつた。バアネットはプラトーンの對話篇を戲曲的對話篇(dramatic dialogues)と述話的對話篇(narrated dialogues)とに區別してゐる。(2) 前者は脚本と同様に、對話

者の臺詞のみから成り立つてゐるものであり、後者は述話者の評註や説明を許す報告の形式を取つてゐるものである。後者には對話の情景を鮮かに描寫し、讀者に深い感銘を與へる特點があるが故に、彼の對話篇のうちで最も藝術的であると言はれてゐるものは、多く後者の型に屬してゐる。しかしプラトンの關心が師ソークラテースの面影を藝術的に再現することから漸く去つて、科學的問題に移つた時、對話を此の形式で書く煩はしさは彼にとつて堪へ難いものとなり、またその必要も認められなくなつた。而して「バルメニデース」を最後に、彼は遂に再び述話的對話の型に歸つては來なかつた。プラトーン自身「テヘアエテース」の始めに此のことを暗示して、「と私が言つた」とか、「と彼がそれに答へた」とか言ふ語句を、煩雜に挿入することを避けて、對話者をして直接對話を行はしむる仕方を取つたと言つてゐる。^(三)

(一) J. Burnet, *Greek Philosophy*, Part I, p. 234; A. E. Taylor, *Plato, The Man and his Work*, p. 300.

(二) J. Burnet, *op. cit.*, pp. 234 f., *Platonism*, p. 52 not. 6.

(三) *Theaet.* 143 c.

このことは「テヘアエテース」と「バルメニデース」との著作の前後を定める一つの鍵鑰を我々に與へ、恰も「バルメニデース」の方が「テヘアエテース」よりも先きに書か

れたものであるかのやうに思はしめる。實際「バルメニデース」にあつては、老バルメニデースの言葉をビュトホドローロスが傳へ、それを更にアンティポホーンが傳へ、而も此のアンティポホーンの言葉がケブハロスの獨語として語られてゐるのである。かくの如く迂回錯綜した話方のために、我々はともすると動詞の主語を判明に知り得ないことさへある。(一)そこでプラトーンも此のことに氣がついたに違ひない。彼は「テヘアエテーツス」を起草するに當つては、最初からエウクレイデースとテルプシオーンとの對話をもつて始め、此の二人が、ソークラテースとテヘアエテートス並にテヘオドロロスとの間に行はれた對話の筆録を、奴隸に朗讀せしめて聞くといふ様式をとつてゐる。此れはプラトーンが「テヘアエテーツス」を書くに際して「バルメニデース」に於けるが如き述話的對話の缺點に改善を加へたものである。故に我々はこゝに「テヘアエテーツス」が「バルメニデース」の後に書かれたものであると推定すべき一つの理由を見るのである。かく考へることも出来るであらう。

けれども少し考へて見ると、プラトーンが「バルメニデース」に於ては何故にかくも廻りくどい説話の方法をとつたか、その理由は他に求めらるべきであつて、此のことを以つて兩對話篇起草の前後を定むる論據となすことは、決して正當ではないやう

に思はれる。即ち「バルメニデース」にあつては、老バルメニデースと當時非常に若かつたソークラテースとの對話が行はれてから、プラトーンが同篇を起草するまでに、約八十年の歳月が経過してゐる、そこでプラトーンは、青年時代に哲學に興味を有つてゐたアンティポホーンが、ヅエーノーンの弟子ビュートホドロスから聞いた談話をケブハロスに語り、ケブハロスをして之を再現せしめ、かくしてこゝに経過した歳月を埋める必要があつた。これが「バルメニデース」の説話を迂廻錯綜せしめた理由であらう。然るに「テヘアエテイツス」にあつては、エウクレイデースとテルプシオインとの對話は、プラトーンが同篇を起草した前年又は同年に起つたことであり、主要人物として此の對話篇の書名に選ばれたテヘアエテイトスは、起草の年またはその前年まで生きてゐたのであるから、「バルメニデース」の如く口から口へ傳へられたとなす必要がなかつたに相違ない。却つて「バルメニデース」に於ても「テヘアエテイツス」に於けるが如く、對話の筆録を後で讀むといふやうにしたならば、簡單になし得たであらうものを、彼が斯くなさなかつたのは同一の趣向を二度續けて繰り返すことを好まなかつた爲めであるとも見られる。私は此の兩對話篇の著作の前後は、正確にこれを知り得ないが、しかしその間には、餘り長い隔りはなく、次に論述の際に觸

れるであらうが如き理由によつて「テヘアエテーツス」の方が前であつたと思ふ。「バルメニデース」は「テヘアエテーツス」に書かれたことを豫想して、初めて正しく理解せられるのではあるまいか。

(一) 例へば Parm. 136 d² (ed. Burnet) の *Kai tiv Zērova ēn yēkēvra pōv* に於ける *ēn* の主語がアンティポホーンであるか、ピュトホドローロスであるかは明瞭でない。シュライエルマッハア、ミュウラア、チャウイット、及び最近公にせられたテイラアの譯では、此の語は譯出せられてゐない。ディエスの譯では誰が主語か不明である。キイファとファウラアとはピュトホドローロスを主語となし、アーベルトはアンティポホーンを主語となしてゐる。

(二) ソークラテースの生れたのは紀元前四七〇年乃至四六九年頃とし (A. E. Taylor, *Socrates*, p. 11 note 1, p. 35)、「バルメニデース」の *οὐδὲν ἔσθ' (127)* をソークラテースの二十歳前後を指したものと解すると、ソークラテースが老バルメニデースと對話を爲したのは四五〇年頃となる。そして「バルメニデース」の書かれた年代を三六九年——三六七年、即ちプラトーンがティオーンに招かれたまでと見る。

(三) Parm. 126 a—127 b.

それ故に爰に私は、兩對話篇が同一の時期に書かれ「テヘアエテーツス」が「バルメニデース」に稍、先立つものであると想定する。而して此の時期は徳論・形相論を中心として發展して來たプラトーンの哲學が、自然學的・形而上學的傾向を取るに至つた轉換期であつたと見られる。此の時期が「批判的」であつたと言はれることは確かに正しいが、^(一)しかし彼が自分と同時代者若しくはアカデミーア以外の人々に對して、彼

自身の學説を明確に主張する爲め、種々な學説を批判したものであると言ふ、單に狹い意味に解してはならぬ。我々がこゝに見るものはかゝる意味での論争的批判ではない。プラトーンの「批判」は外部の學説に向ふよりも自己の内部に取り入れた諸々の成素に向けられた。彼が己れのうちに取り入れて自己の哲學を形成し、それを基礎づけるに役立たしめてゐたところの學説を、彼は深く反省したと言ふ意味に於て、批判的であつた。アリストテレースは「形而上學」の周知の一頁で、プラトーンの哲學の形成せられた過程を我々に語つてゐる。それによるとプラトーンの哲學は多くの點でピュータゴラス派のそれに似てゐるが、^(三)しかし、若い時から、先づクラテュロス並にヘーラクレイトスの、一切の感覺的なものは常に流轉し、此のやうなものに就いての知識は存在しないと言ふ教説に親炙してゐたが、後年になつても此の教説を執持してゐた。即ちアリストテレースに従へば、プラトーンは彼の青年時代に、ヘーラクレイトスの哲學の影響を非常に受けたのである。ところでヘーラクレイトスに於ては、まだ感覺的なものと知的なるもの、現象と形相と言ふが如き區別乃至對立は存しなかつた。アレクサンドリアのクレイメンヌ(Clemens Alexandrinus)によつて傳へられてゐる斷片によれば、ヘーラクレイトスは「永へに命ある火」(ἑρπ

(iii) *deïōon*) が過去未來を通じて永遠に存在することを教へてゐるけれども、此の「永へに
 命ある火」も決して非物質的・超越的存在として、感覺的流動的なものに對立せしめ
 られてゐるのではない。却つてそれは、ハインツェが正當に主張してゐるやうに、「物
 質的なもの」(*etwas materielles*)「一切の存在の物質的基底」(*materielle Substrat alles Seins*)
 と解すべきものである。(四) 永遠に流轉する世界を超えて此れに對立する靜止せる叡
 知的な世界、若しくは感覺に對立する知識・流動に對立する不變なる存在は、未だ彼の
 思索の範圍には入つて來なかつた。彼によれば一切はたゞ流轉するものとして把
 握せられた。しかし流轉するものが流轉せざるものとの對立に於て考へられたの
 はプラトーンに於て始めてゐあつた。プラトーンは直接ヘーラクレイトスの著書
 を讀み、若しくはクラテュロスに教へられて間接的に彼の考に接し、これによつて現
 象界を説明し、生成に對して存在を、感覺に對して知識を立て、爰に彼の二世界理論
 に基礎を與へた。固よりその際ソクラテース的「德」の觀念が中心となり、その契機
 となつてゐたことは言ふまでもなからう。さて轉換期に於けるプラトーンは、獨り
 師ソクラテースの影響から除々に離れたのみではなく、同時に他の哲學の影響か
 らも離れた。そこで彼は先づ早くから彼の哲學の形成に影響を與へてゐた生成流

轉の哲學を反省し、批判する必要を感じたに違ひない。そして此の哲學を代表するものとしてヘーラクレイトス並に——彼の解釋に従ふと、結局ヘーラクレイトスと同一の考に歸着するところの——プロタゴラスを選んで、生成流轉するものをその對象とする感覺を吟味した。これが「テハアエテーツス」の課題であつた。故に此の對話篇が著しく心理學的傾向を示すに至つた理由も、これよりして理解せられるであらう。

(一) 例へば Burnet, *Greek Philosophy*, Part I, pp. 234 f.; H. Rader, *Platons philosophische Entwicklung*, S. 280. 以下に「批判」と言ふのは先づアガリアの摘發と言ふ意味をふくむ。しかしそれはエウホリアへの準備でなくてはならぬ。故に「テハアエテーツス」と「バルメニデース」とは、やがて来るべき後期の哲學への「準備的對話篇」と、正當に、呼ばれ得る。

此の兩對話篇が積極的に結論に達してゐない理由を、我々は此の立場から理解し得ないであらうか。

(二) *McLaph. I (A)*, 987 a 32 seq. プリストテレースは多くの個體でヘーラクレイトスのことを語つてゐるが (*McL. I*, 987, a 33 seq.; *XII*, 1078, b 14; *De cael.*, III, 289, b 30; *Phys.*, VIII, 265, a 37) その場合常にプラトーンを念頭に置いてゐたらしい。 *De cael.* の中 (*ibidem*) の *ἐπὶ τῷ κέντρῳ τῶν ἀστροῦ* は火のことであつて、永遠に流れるものに對立する「何か一つのもの」の意味に解すべきではなからう。

(三) H. Diels, *Krag. d. Vors.*, 5. Aufl. v. W. Kranz, B. 30 (*Clemon. Strom.*, IV, 105.)

(四) M. Heinze, *Die Lehre vom Logos in der griechischen Philosophie*, S. 57.

(五) *Theaet.* 152c. によれば、バルメニデースを除く一切の哲學者、プロタゴラス、ヘーラクレイトス、エムペドクレース及び喜劇詩人エピクハルモス、悲劇詩人ホメーロスは此の考をもつものである。プラトーンは「テハアエテーツス」でヘ

「ラクレイトスと特にプロータゴラスの思想を吟味してゐるが、しかし必ずしも此の二人のみが取り扱はれてゐるのではない。」

かくして生成流轉の問題は「テヘアエターツス」に於ては、知識が生成するものを對象する感覺に對して、また臆斷 (dóxa) に對して、有するところの關係として取り扱はれてゐる。しかしプラトーンは、後に稍、詳説する如く、此の問題を、知識とは何であるかと言ふ形式に於て問うてゐる。ところで生成の問題は、これに對立するところの存在の問題をも糾明しなければ決して完全に解決せられるものではない。換言すれば、ヘーラクレイトスのプロータゴラス的立場に對立するエレア派的形相論的立場を「批判」しなければならない。故にプラトーンは明らかに流動説を吟味した後には、それに對立するバルメニデース、メリッソス等の運動を否定して一切は一であると説く學説を吟味すべきであると言つてゐる。^(一)しかしこの吟味は「テヘアエターツス」では遂に企てられなかつた。そして我々はプラトーンの此の批判を「バルメニデース」に於て見るのであつて、こゝに「テヘアエターツス」が「バルメニデース」に先き立つて書かれたものであると解釋すべき一つの手がかりを有つのである。

(一) Theaet. 180c—181b. こゝではエレア派がヘーラクレイトスの哲學に對立するものとして挙げられ、形相論には言及せら

れてゐない。併しエレア派のプラトーンに及ぼした影響は形相の存在の理論にあつた。そして「バルメニデース」はエレア派の學說と形相論とを批判してゐる。故にこゝに兩者を流動說に對立するものとなすことは是認せられるであらう。

何故に「テヘアエテーツス」ではエレア派の批判が爲されなかつたか。テヘアエテーツスがその吟味を求めた時に、プラトーンは、ソークラテースをしてそれを拒ましめ、その一つの理由として次のやうに言はしめてゐる。^(一)バルメニデースはホメーロスの所謂「畏敬すべく、また恐るべき」^(Gonoi)人間である。「と言ふのは、私は非常に若かつた時、もう高齡に達してゐた彼と會談したが、彼は極めて蘊蓄のある精神を有つてゐたやうに思はれた。それで私共は彼の語つたことを理解せず、加之、彼が何ういふ意味をもつて話をしたかさへ、わからないのではないかと氣づかうのだ……」。これがプラトーンの、バルメニデースに對する批判を差控へた一つの理由である。周知の如く「バルメニデース」は若い日のソークラテースがバルメニデースと行つた談話を主題として作られた對話篇である。更に「ソブヒスタ」に於てもソークラテースは、青年時代にバルメニデースと談話を交へたことに言及してゐる。^(二)それ故に我々は此の會談を史實であるとして見てよいであらう。^(三)此の會談の史實性が疑はれるのは、談話の内容をも悉く史實と做すことによるであらうが、此の會談の史實と談話の内容の史

實性とは切り離して見らるべきである。我々はその時の談話が「バルメニデース」に語られてゐるまゝの内容のものではなかつたと推斷すべき理由を有つてゐる。(四)と
 ころで今日では「ソピヒスタ」が他の二篇よりも後に書かれたものであることは、先づ
 何人も疑ひ得ざる定説と言つてよい。故に我々は上に引用した「テヘアエテーツス」
 の一節を、後に挿入せられたものであると解せざる限り、——また實際我々はかやう
 に解すべき理由を少しも有たぬ——それは、プラトーンが「テヘアエテーツス」を書い
 た當時、バルメニデースに對して有つてゐた態度を告白したものである見なければ
 ならぬ。それ故に我々は彼が「テヘアエテーツス」を書いた當時、既に流動説に對立す
 る「萬有は靜止する一である」(五)と言ふ説、並にそれに關連する形相論に對して批判の必
 要を認めてゐたが、未だその考へが充分に成熟せず、その爲めに、慎重にそれを差控へ
 たものであると見るべきではあるまいか。「テヘアエテーツス」篇に於ては形相論に
 就いて少しも語られてゐない。しかし此れは「バルメニデース」に於ける形相説批判
 の後にそれを拋棄したのではなく、上記の理由によつて殊更沈黙したものであらう。
 そして此の沈黙は、充分なる準備の後「バルメニデース」に於て破られた。「バルメニデ
 ース」に於けるアポリアの犀利なる剔出と巧妙なる談話の運び方とは、此の對話篇が

決して即興的に書かれたものではなく、プラトーン自身幾度か反芻熟慮し、恐らくまたアカデミーアの内部に於ても幾度か論談せられたものであることを、我々に暗示しないであらうか。我々はプラトーンがバルメニデースに對しては、「畏敬すべき」「恐るべき」人として、ヘーラクレイトスの哲學の批判の後、彼の語つたことを深く反省して除ろにそのなすべき批判の態度を定めたと解釋すべきであらう。「テヘアエテース」に於て最早語られてゐない形相論が「バルメニデース」に於て再び取り上げられ、そのアポリアが摘發せられてゐるのは、後者が前者に先立つて書かれた爲めではなく、却つてプラトーンの熟慮の結果によるものであらう。プラトーンの哲學の形成に與つて大きい役目を務めたもう一つのものはビュータハゴラース派の影響であつた。此のことは今我々の問ふ問題ではないが「バルメニデース」に於ける形相論のアポリアの摘發はまたビュータハゴラース派の影響に對するプラトーンの批判を含んでゐる。蓋し形相論のアポリアはそれがふくむ「分有」(μέθεξις)の解釋に存し「分有」はビュータハゴラース派の「模倣」(μίμνησις)に相應するものであつた。^(六)

(一) Thaeet., 183 e—184 a.

(二) Sophist., 217 c.

(三) バアネット、ティラアは勿論史實としてゐるが、ロスも、それは極めて疑はしいが、その「會談は起つたのであるかも知れない。起つたのであると想定しよう」と言つて、大體史實としてゐるやうである。(W. D. Ross, *The Problem of*

Socrates, in the "Proceeding of the Classical Association", XXX, p. 14.)

(四) 當面の問題ではないから他日に譲るが、「バルメニデース」の内容なども史實のまゝであると認める者は先づあるまい。

(五) Theaet, 183 e.

(六) Arist. *Metaph.* I (A), 987 b 9 seqq.

二

「テヘアエテーツス」はメガラの人エウクレイデースとテルブシオーンとの簡単な對話によつて始められてゐる。二人ともソークラテースの弟子であつたことは「ブハイド」によつて知られてゐる。彼等は、アカデーメイアの最も優れた一員であつたが、負傷の上重い赤痢に罹つてコリンツフスの陣營からアテヘーナエへ、歸還の途上にあつたテヘアエテーツスのことを語つてゐる。此の戦はエウアザックスの説によれば「エバメイノーンダス」(*Etrapeuōndas*)がオネウム(*Onem*)の山でアテヘーナエとスバルタの軍隊の戦線を突破した紀元前三六九年の戦であつたと思はれる。^(一) 歸還の後、テヘアエテーツスは間もなく死んだらしが、プラトーンが「^(二)それどころか更に」(*ἢ οὐκ ἔτι*)彼は軍隊内に起つた病氣にやられてゐる」と言つてゐるところより見る

と、彼の死因は負傷であるよりもむしろ赤痢であつたに相違ない。プラトーンは、若し避け得るならば、存命中の人を對話の人物としなかつたと言ふことが、^(三)此の場合にも當て嵌るならば、本篇の書かれたのはテヘアエテイトスの死後、即ち、少くとも三六九年以後でなければならぬ。數學に對する非凡の才能を有ちながら、遂にそれを充分に發揮するを得ずして夭折したテヘアエテイトスの性格を、プラトーンは爰に美しく描き出してゐる。これはアカデメイアの會員にして、最初のアテヘーナエの數學者であつた彼に對するプラトーンの哀悼の辭として讀み得ないであらうか。若しプラトーンが哀惜の念尙ほ措き難いうちに執筆したとすれば、遅くも三六八年以後ではなかつたであらう。故に我々は此の對話篇を紀元前三六九年から三六八年までの間、プラトーンの六十歳乃至六十一歳の時の著述と見ることが出来るであらう。^(四)

(一) Dr. Eva Sachs, de Theaeteto Atheniensi, 1914. Cf. A. E. Taylor, Plato, p. 320.

(二) Theat. 142 b.

(三) Burnet, op. cit., p. 235.

(四) 「テヘアエテイトス」の著作年代を紀元前三六九年乃至三六八年とすることは、今日廣く承認せられてゐるやうである。尤もその根據に就いては多少の相違がある。Raeder (op. cit. S. 295 f.) は三六八年、Ritter (Die Kerygmatiken d. pl.

Phil., S. 7 u. S. 104.) は「三六九年、パナエトは」(op. cit. p. 238. 「三六八年或はそれより稍後」、テトラア (op. cit. p. 320.) は「三六八年若しくは三六七年の始め」としてゐる、等々。

エウクレイデースは、ソークラテースが生前——訊問の直前に、テヘアエテイトス並にテヘオドロースと共に行つた對話を筆録し、正確に覺えてゐない處はソークラテース自身に聞いて、殆んど完全に訂正増補しておいた。此の筆録を彼はテルプシオーンの求めに應じて奴隸に朗讀せしめる。

(1) Theaet. 210d. 即ち此の對話は三九九年に行はれた、ことになる。

ソークラテースがテヘアエテイトス並にテヘオドロースと談話を行つた場所は、アテヘーナエの體育場であつたらしい。(1) ソークラテースとテヘオドロースとの對話によつて知られるやうに、此の人はキューレーネイ (Cyrene) の人であるが、當時アテヘーナエに来て「幾何學やその他の哲學」を教へてゐた。(2) 多くの青年が彼の下に集つたのは、特に「幾何學のために」であつて、テヘアエテイトスは、かゝる青年のうちで最も秀でた一人であつた。しかし彼はアテヘーナエで行はれてゐた哲學問と答、肯定と否定とによつて行はれるソークラテース的對話法や、抽象的なロゴス (phrasis logos) に(4) は習熟してゐなかつた。(5) 彼が既に世を去つたプロタゴラスの讚美者として、そ

の學説を奉ずる者であつたことは、此の對話篇を考究する上に注意する必要があらう。此の對話には此の三人の外に小ソークラテースが登場するが、此の人は無言のうちに終始する。

(一) Theaet. 144 c. *ἐν τῷ ῥήματι*, 116 言葉に就いて, Campbell, The Theaetetus of Plato, 2nd ed. p. 10 の註を見よ。

(二) *ibid.*, 143 d.

(三) *ibid.*, 143 e.

(四) *ibid.*, 146 b.

(五) *ibid.*, 165 a. キヤムベル上掲の註釋を見よ。

「バルメニデース」がアポリアによつて組み立てられた對話篇であるやうに、「テヘアエテリツス」も亦三つのアポリアを根幹として組み立てられた對話篇である。そして前者のアポリアは結局「分有」(*μέθεξις*)の問題に歸着するが、後者の三つのアポリアも亦結局「知識」(*ἐπιστήμη*)の問題に歸着する。ところで希臘の思索の範圍に於ては、對象を有たない純作用としての知識といふが如きものは考へられてはゐなかつた。知識は必ず何ものかの知識でなくてはならなかつた。それ故に「知識そのもの」と言はれる時でも、それは無對象の知識、作用としての認識そのものをではなくして、感覺、肉體等より離れた「それ自體純粹な思惟」(*αὐτῇ καὶ αὐτῇ εἰς ἑαυτὴν τῇ διανοίᾳ*)^(一)によつて達せ

られた知識を意味してゐた。従つて知識の問題は同時にその對象の問題を含んでゐた。前期のソークラテース的プラトーン的哲學にあつては、知識の對象となつたものは、徳の概念若しくは形相であつた。「ラケヘース」では「勇氣」(ἀνδρεία)も「戦争」その他一切の場合に於て、恐るべきことと豪膽なるべきこととの「知識」として定義せられ、更にその意味が擴充せられて「一切の善いことや悪いこと並にあらゆる事情に關する知識」であると言はれてゐる。^(三)故に此のやうにして「勇氣」は徳の一つの部分ではなくして「知識」として「徳の全體」(ὅλητης ἀρετῆς)となつた。^(四)勇氣を定義しようとした最初の企ては失敗に終つてゐるが、我々は爰に知識が徳とせられてゐることを記憶しなければならぬ。徳が教へられるのは、徳が知識として前提せられるからである。^(五)即ち徳が知識の對象だからである。前期の倫理的形相説に於ける知識論は「國家」に於ける「善の形相」の教説に於てその絶頂に達したが、プラトーンが形相説を離れた時「メノ」以來認識の一つの方法であつた想起も、その對象であつた形相的徳も彼の哲學の前面から後退した。そして爰に改めて知識の問題を訊ねる必要をプラトーンは感じたが、それは前期に於けるが如き意味の倫理的な知識ではなかつた。此の變化は、固より急激に起つたものではなかつた。ソークラテースの教説を破壊して自説を之

に代へるといふが如きことは、プラトーンの夢想だにしなかつたことであらう。却つてソークラテースの人格とその教説とを能ふかぎり忠實に解釋することが、彼の最初からの企圖であつたと思はれる。後世に錯綜した問題を遺すに至つたのも、その一半は、たしかに彼のソークラテース解釋に依存してゐたと言ふことが出来るであらう。一般に倫理的なるものは、プラトーンがソークラテースから受け繼いで、終生保持し、發展せしめたものであるが故に、例へば最も晩年の著作と言はれてゐる「諸法」(Leyes)に於てさへ、人は到る處に最初期の思想を見るであらう。同様に我々は前期の對話篇に於ても後期のプラトーン哲學の特徴が萌芽として含まれてゐるのを容易に觀取することが出来る。

(一) Phaedo, 66 a. しかし我々は此のやうな考を前期に屬する對話篇の多くの個處で見ろ。

(二) Laches, 194 e—195 a.

(三) Ibid., 199 c.

(四) Ibid., 199 e.

(五) Meno, 87 b—88 a.

プラトーンが青年時代に、ヘーラクレイトスの流れを汲んだ哲學者クラテュロスに師事したことは、既にアリストテレーズの證言によつて述べた。此の人の名をそ

の標題とする對話篇は、そのうちに「テヘアエテーツス」に發展して來るべき問題を含んでゐる。その中でプラトーンはソークラテースをして「そこで如何なる仕方で諸々の存在してゐるものを學び或は探究すべきであるか、それを知ることとは貴君にとつても私にとつても恐らく容易ならぬことであらう。だが、名前からではなく、却つて名前からよりも寧ろ諸々の存在してゐるものを、それら自體から學び且つ尋ねばならぬと言ふことには、喜んで我々は同意しよう」と語らしめてゐる。^(一)「テヘアエテーツス」の知識の問題はこゝに出發する。それはカント學派の如く價值を對象とするものではなくして、存在を問ふところの知識である。また形相ではなくして、諸々の存在してゐるものを、名前からではなく、即ち「音聲による模倣」^(二)からではなく、存在してゐるもの自體から知ることがプラトーンの「テヘアエテーツス」に於ける課題であつた。彼がこゝに企圖したものは、それ故に、存在を探究する彼の哲學の道程の開拓であつた。問題を解決することではなくして解決への準備であつた。「テヘアエテーツス」は眞理の探究者プラトーンが、知識への道を發見しようと努力した魂の記録である。

(一) Cratylus, 439 b. シェンナミット(=Schauschnitt, Über die Unechtheit des Dialogs Kratylus, S. 335)の註を「非

ソークラテース的なもの」と見たのは正しい。だがそれは此の對話篇を偽作となすことの證明にはならない。

(11) *ibid.*, 423 b.

「テヘアエテーツス」に於ては問題が如何にして導き出されたか。ソークラテースの「知識とは何であるか」(115c)と言ふ問ひに對して、テヘアエテーツスが知識の個々の例を列舉した時彼は知識が何に屬するか、どれだけあるかを問ふのではなくして「知識それ自體が一體何であるか」知りたいのである(116c)と言つてゐる。即ち知識自體の概念がこゝに問はれてゐるのである。そしてテヘアエテーツスがそれに對して與へた答は「感覺」(*aisthēsis*)であつた(115c)。ところで我々はこゝに注意すべき一句を見出す。即ちソークラテースは「それでは、常に、感覺は存在してゐるものに關り、またそれは知識なのだから、無謬である」(*Alcibiades apō tou eutros uel eutru kai dyedēs os ēnucēmōn oōsa.*) (115c)と言つてゐる。此の言葉は知識を感覺であると定義するテヘアエテーツスの前提を一應認容するとして言はれたものであるからして、我々はこれによつて二つのことを讀み取ることが出来る。即ち(一)知識は存在してゐるものを、(徳のみではなしに)その對象となすべきであると言ふこと、並に(二)存在を對象するが故に知識は無謬でなければならぬと言ふことである。此のソークラテースの言葉

を他の反面から考察するならば、感覺が知識であるためには、それは此の二つの條件を充すものでなくてはならぬことになる。そこで倫理的形相説から離れたプラトーンが、知識の範圍を形相の世界から個物の世界に擴張するに際して、新たな姿に於て解決を追つたところの知識論の課題は(一)存在は感覺によつて把握せられるか、換言すれば感覺は存在を對象とするかであつた。次には(二)存在を對象としないものが知識であり得るか、従つて無謬であり得るかであつた。此の第一の課題は「テヘアエテーツス」の前半に於て取り扱はれてゐる感覺論であつて、それは知識との關係に於て問題とせられる。第二の課題はその後半に於て取り扱はれてゐる「臆斷」(δόξα)の問題となる。蓋し大體「テヘアエテーツス」以後に於ては「臆斷」の意味が變化したが、前期の諸對話篇、例へば「メノー」、「プヘイドー」、「饗宴」、「國家」などに於ては、それは「知識と無知との中間」(一)にあつて現象の世界を生成を對象とするものであつた。(二)而して臆斷は誤謬をふくむことがあるが故に、有謬の臆斷が如何なるものであるかを究め、これを先づ除外して、眞なる臆斷が知識と如何なる關係を有するかを吟味する必要がある。爰に於て「テヘアエテーツス」の後半に於ける臆斷の問題はまた二つに分たれる。

(二) 我々は「國家」の第五、第六、第七卷に、かゝる考を見る。特に第七卷 533e—534a を見よ。

それ故に「テヘアエテーツス」に於ては三つの問題が、夫々知識との關係に於て取り扱はれてゐる。即ち(一)感覺、(二)臆斷、(三)ロゴスを伴ふ眞なる臆斷。

三

「知識は感覺である」と言ふ定義は、プラトーンの解釋に従ふと、プロータゴラスの有名な章句「人は一切のものゝ標準である、存在するものに就いては、在ると言ふことの、また存在しないものに就いては、在らぬと言ふことの」と同じことを意味する(152a)。何となればプロータゴラスによれば「私に見える」(*ἐμοὶ φαίνεται*)ものは「私にある」(*ἐστὶν μοι*)ものである。風そのものが寒くあるのではなくして、寒く感ずる(*αἰσθάνομαι*)人に寒くあるのである。故に *φαίνεται* (それが見える)と言ふことが *αἰσθάνομαι* (彼が感覺する)と言ふことではなくてはならぬ(152b)。此のやうにしてプラトーンは、プロータゴラスの「ある」の意味を「見える」と言ふ媒介によつて「感覺する」と同じものと解釋した。故に彼は「だから現相 (*φαντασία*) と感覺とは、溫暖やそのやうな一切のものに於ては、同じものである。と言ふのは各人が感覺するものは、おそらくまたそのまゝ各人に存在するのだから」(152c)と言つてゐる。プラトーンの此の解釋がプロータゴラ

イスの眞意であつたか何うか、またプロタゴラスの「人」が個人であつたか、人間一般であつたか、等々のしばしば論争せられた問題は、こゝでは問題ではない。^(一)しかし我々はプラトーンがそれを個人の意味に解釋してゐたことを附言すれば充分である。知識が我々の探究の主題となる場合には、何等かの意味で「ある」が我々の領域に入つて来る、それ故に嚮きにも引用したやうに、知識と見做される感覺は、常に存在してゐるものを對象とすると言はれてゐる。^(二)しかし此のやうな存在が眞に存在するものであるか何うか——プラトーンは少し先きで「さう呼ぶのは正しくない」^(152c)と言つてゐる。故に若し存在をそのやうに解釋するならば、存在は感覺が傳へる通りのものでなくてはならぬ。しかるに感覺は瞬間的にして永續性を缺き、絶え間なく轉變するが故に「我々が存在すると言ふ一切のものは、實際は、移動、運動及び相互の混合から生ずる」^(152c)ことにならう。即ち一切のものは存在ではなくして生成でなくてはならぬ。ところでこれはヘーラクレイトスを始め、その他流動説を主張する人々の説くところである。

(一) 所謂 *homo-mensura-Satz* に於ける「人」が「個人的」人間ではなくして、「種族的」人間であると解する者の代表者として我々は *ヒュムヘン* (*J. H. Gumpertz, Griechische Denker, I, S. 373*) をあげておかう。ディオゲネース・ラエルティウス (*DK*,

53)に残されてゐる断片によれば、プロータゴラスは、神々の存在の問題が不可知なる理由の一として、人間の生命の短かいことをあげてゐる (Diels, *Fr. B.* 4 尚ほ波多野博士の「西洋宗教思想史」二八一—二八二頁に全文の譯がある)。そこで若し此の「人間の生命」[*ὁ βίος τοῦ ἀνθρώπου*]と言はれる時の「人間」と *homo-mensura-Satz* の「人間」とが、同じ意味であるとするれば、それは個人でなくてはならぬ。何となれば種族としての人間の意味ならば、短かいとは言へないからである。尚ほ波多野博士の「西洋宗教思想史」二六九—二七九頁を參看。

(二) Theaetetus, 152 c. 前掲四七頁

このやうにしてプラトンはプロータゴラスとヘーラクレイトスとを結合し、前者によつて感覺の主體が個人的、瞬間的であることを、後者によつて感覺の對象が常に轉變流動して止まぬことを示した。そして我々はこゝに於ても、希臘哲學に於ける認識の一つの原理「同じものは同じものによつて知られる」が、此の二つの説を結合する紐帶となつてゐたことを知るであらう。然らば感覺とは如何なるものであるか。^(一) 感覺は常に變化する、それは單に人によつて夫々異なるばかりではなく、同一の人間にあつても絶えず變化するところの運動である。「黒でも白でも、その他どのやうな色でも、眼の、それに對應する運動^{プロテラ}との衝突から生ずるものだ、だから我々が色と呼んでゐるものは、衝突するものでもなければ、衝突を受けるものでもない、却つて中間にあつて各自に夫々個別的なものである」(153 c—154 a)。これはプラトーンが色の

感覺を説明した一節である。「衝突するもの」とは「眼又は視覺であつて、即ち、能動的運動である」衝突するもの及び「それ（眼）に對應する運動」とは、我々の視覺の對象であるところの外、即ち受動的運動である。色は此の二種の運動の「中間に生じた各自に個別的なるもの」(μεταξύ τῆ ἐκείνου ὁδῶν γενεαῖς) である。これは視覺の一つの場合に就いて語られたことであるが、我々はこれを聽覺觸覺等一切の感覺にも當て嵌るものと見ることが出来るであらう。故に嚮きに通例「存在する」と言はれてゐるものが、實は、轉動、運動及び「相互の混合」(ἐπίσμιξις πρὸς ἀλλήλους) (152c) から生成するものであると言はれた時、此の「相互の混合」とは、その意味内容に於て、今の「中間に生じたもの」と同じものであつたと解すべきであらう。そして此の「中間に生じたもの」は「各自に個別的なるもの」とせられてゐる。然らば如何なる意味に於て感覺の世界は個別的であるか。

(一) Aristotelis de Anima, 404 b 17 f. 以下では、しかし「ティーホエウス」(57a-c) に就いて言はれてゐる。

(二) 私は αἰσθήσεις の譯語として「感覺」を當ててゐる。しかしギリシア語の「アイステヘシス」は、現代の心理學で感覺と呼ばれてゐるものよりも、遙かに意味が廣く。ユマ (J. I. Bear, Greek Theories of Elementary Cognition, p. 202.) によれば、ギリシア人の多くは sensation と perception との區別を知らなかつた。更に彼は「プラトーンの「アイステヘシス」には近代の心理學者によつて feeling と言はれてゐる要素のあることを、指摘してゐる (Ibid., p. 273).」尤も後の點に關しては、甚だ明瞭な缺くが Σιχιμ (A. Chaignet, De la psychologie de Platon, 1862, p. 257 etc.) によつて既にプラトーンの感覺説の要點の一つとして、「快苦の感情」(le sentiment de peine et de plaisir) をあげてゐる。

各自に個別的なる「感覺の世界は、やむことなく生成する二種の運動が互に衝突する瞬間的狀態であると共に、感覺の對象とその主體との相對の世界でなくてはならぬ。従つて感覺の對象は一定の性質を有つことが出来ない。白さとか熱さとか言ふが如き感覺的性質は、二種の運動の結合干涉によつて、その運動が存続する限り、ここに現れる瞬間の狀態であるからして、何れか一方の運動に何等かの變化が起るならば、感覺そのものも亦それに伴つて變化せざるを得ない。然るに若し白さや熱さが對象の一定の不變的性質であるならば、主體の條件によつて左右せられる筈はなく、また主體の、即ち眼や觸覺の、有する性質であるならば、何を見、何に觸れても白く、或は熱くなければならぬ筈である。ところが事實はこれと反對であつて、同一の色も見る眼によつて、或は見る時によつて異なるのである。このことを人は更に數や量に就いても語ることが出来る。六個の骰子は四個の骰子に比較すれば、後の數の二分の一だけ「多く」であるが、十二個の骰子に比すれば、その二分の一だけ「少なく」ある。而も六個と言ふ數そのものには、何ものかゝ附加せられたのでもなく、また其れから何ものかゝ除去せられたのでもない。六個の骰子は、このやうにして「多く」であるとも「少なく」であるとも言はれ、互に矛盾する二つの述語を同時に許すと見られる。^(一)かく

の如く、二種の運動の中間に生成する各自によつて異なるところの個別的な感覺の世界は、相對の世界として呈示せられるが、此のやうな生成する運動は、前期の哲學に於ては、現象の世界にあつて如何なるそれ自體の存在性をも有たぬものとして、思惟の靜止的世界の下位に置かれ、それに從屬するものとせられてゐる間は、プラトンの哲學の體系に少しも矛盾を生じなかつた。しかし今や現象の世界と思惟の世界とが次第に接近しつゝあるプラトンの轉期にあつては「我々が思惟するもの」(*ta dianooumena*) (154 e) と相對的生成の世界との間には、相容れない「無數の矛盾」(155 c) が起るに至つた。そこでプラトンは先づ生成流轉の説を深め得る限り深めて、此の矛盾を逃れることが出来るか否かを試みるため、上來述べた感覺説を一層詳かに解釋し吟味することを企てた。彼が、ソークラテースをして、有名な人々の「思想の隠された眞理」(155 d) 又は「神祕説」(156 a) と呼ばしめてゐるものは即ちその感覺説である。

(1) この問題は、相互の比較によつて「より大」と「より小」とが測定せられる相對的な標準 (*skhema*) と、絶對的標準とな區別する *Politeia*, 283 d ff. に於て答へられる。

此の説に従ふと「一切は實に運動であつて、それ以外には何もものな」(156 a)。運動は多種多様であるが、要するに「能動」(*to poiein*) の力を有つてゐるものと「受動」(*to pathen*)

γενν) の力を有つてゐるものとの二種になる。此の二種の運動の「結合と軋轢」(ὁμιλία
 καὶ τριψύς) から感覺が生れる。此の感覺の數には限りがないが、それらは常に悉く双
 生兒(δίδυμα)である、即ちその一方は「感覺せられるもの」(αἰσθητόν) 對象であり、他方はそ
 れと共に生み出される「感覺」(αἰσθησις) である。此の感覺せられるものと感覺とは分
 つことの出来ない二つの運動である。人は此の感覺到視覺、聽覺等々の名を與へて
 ゐるが、尙ほ名を與へられてゐない感覺の數も無限である。また感覺せられるもの
 (對象) の類は感覺のそれと同類であつて、例へば一切の種類の色は一切の種類の視覺
 に、また一切の種類の音は一切の種類の聽覺に似てゐる。その他の感覺到あつても
 同様である。ところで能動と受動、感覺せられるものと感覺するものは悉く運動で
 あるが、此の運動の中には「早さと遅さ」(ταχύς καὶ βραδύτης) がある。遅いものは同一
 の場所で運動し、それに接近してゐるものに向けられて爰に双生兒を生む。生れた
 双生兒は、彼等を生んだ運動よりも早い運動であつて、一つの場所から他の場所に運
 動する。今此れを視覺の現象に就いて見るに、遅い運動とは眼とそれに對應する對
 象、例へば白い色とである。こゝでは眼が受動、色が能動であると考へられてゐる。
 感覺の作用は常に受動的であつて能動的ではない、従つてそれは外界を構成するも

のではなくして、外界の印象を受け納れるに過ぎない。今此の遅い二種の運動の結合と軋轢とによつて、双生兒即ち早い運動が生れる。その一方は白さであり、他方は視覚である。眼から出づる視覚と「一緒に」なつて色を生み出すものから出する白さとは互に他方に向つて運動し、眼は視覚で充されて「視覚ではなしに視る眼」(*ὁπδανῶς ὁρᾷ*) (156e) となり、對象は白さで充されて「白さではなしに白いもの」——木材であらうと石であらうと——」(*ibid.*)となる。視覚の現象はこのやうにして起るのであつて、此の過程は他の感覺の場合にも同様である。

此等の運動に於て、能動的なるものと受動的なるものとは、確定してゐて、夫々個々別々に存在するのではなく、且つ、互に結合しないうちには兩者とも起り得ないからして、人は、此の運動に、能動的なるものと受動的なるものとの概念を一定不變なものとして確立することは不可能である。蓋し何か或るものと結合して能動的であるものも、他のものに衝突すると受動的となるからである。即ち同じ眼も、視られる時には能動的であるが、視る時には受動的である。それ故に「如何なるものも、それ自體獨立した一つのものとして存在するのではなく、常に何ものかに對して生成するのであつて、存在すると言ふことは全く廢棄せらるべきものである」(157a)。なるほど我々

は習慣上、または無知のために、此の言葉を用ひてはゐるが、嚴密に言ふと靜止を示す「何ものか」とか「何ものかの」とか、或は「私の」とか「此の」とか「あの」とか言ふ言葉を用ひてはならない。しかし「本性的には」(*κατὰ φύσιν*)「生成してゐるもの、作られてゐるもの、消滅してゐるもの、とか變化してゐるもの」(*γεννώμενα καὶ ποιοῦμενα καὶ ἔπτολόμενα καὶ ἐκλινόμενα*) (157b) と言ふ表現が、それに代つて用ひらるべきである。

以上が「思想の隠されたる眞理」として説かれてゐる「有名な人々の」或は「一層文雅なる人々」(*κοινοῦτότερον*)の感覺説の提要である。それを説き終るに當つてプラトーンは、ソークラテースをして、このやうな事柄に就いて自分自身は何も知らず、またそれは自分の學説ではないと言はしめてゐるところより見れば、これがソークラテース若しくはプラトーンの創意による學説でなかつたことは明らかであらう。加之「有名な人々」「文雅な人々」と複數を用ひてゐることは、たゞ一人の人の學説ではなく、或る學派若しくは團體に於て主張せられたものであつたことを暗示する。また此の説を語るに先き立つてソークラテースは「入團してゐないものが誰れか聞いてゐはしないか」(*μή τις τῶν ἀμειβτῶν ἐπακούει*) (155c) 氣を附けよと言つてゐる。*ὁ ἀμειβτῶν*とは本來神祕教團に入團してゐない人々を意味する、例へば「ゴルギアス」ではかゝる意味で用

ひられてゐる。^(一) 故に我々は此のやうな感覺説が、或る一群の人々によつて主張せられてゐたが、これを「テヘアエテーツス」に於て見るが如き形に組織したものは、プラトーンその人であつたと見ることが出来るであらう。その最初の主張者はアリストイボス(Aliotus)であるとしば、言はれてゐるが、^(二) アリストテレースの「形而上學」は却つてクラテュロスではなかつたかを疑はしめる。^(三) 何れにもせよ、ヘーラクレイトスの強い影響を受けた人であつたことは確かである。

(一) Gorgias, 493 a, b. 二回用ひられてゐる外、Phaedo, 69 c. にもある。

(二) 例へば Ueberweg-Heinze, Geschichte d. Phil. I³, S. 136; Th. Gomperz, Griechische Denker, II, 4. Aufl. S. 433. 等。

(三) Aristotelis Metaphysica, I (A), 887 a 32. Burnet (Gr. Ph. I. p. 242) はクラテュロスのものと見てゐる。

さてプラトーンが一致し難いとして否むでゐるのは、此の感覺説そのものではなく、感覺をもつて直ちに知識と見る立場である。このことを、やがて明かになるプラトーンの批判によつて、人は知ることが出来る。けれども感覺の説明としては、プラトーンも大體上記の説に一致し、之を終生維持してゐたことは、例へば最も初期の對話篇と見られる「メノー」を始め、後期の「ヒレーブス」、「ティーマエウス」の中で彼が説いてゐるものと比較して見れば容易にわかる。^(一) ところで感覺の特徴はそれが流

動的であり相對的である點に存する、然るに感覺は人を欺くが故に知識ではないと言ふ非難は、感覺の此の流動性、相對性を忘却することから起るのである。その非難の要點は、若し感覺の傳へるものが眞であるならば、病人或は睡眠者の感覺も健康者或は覺醒者のそれも、その起る過程は同一であるが故に、後者は前者から區別せられず、從つて等しく眞でなければならぬ、と言ふ結果になる、然るに睡眠者や病人の感覺は、眞であるとは言はれないと言ふのである。けれどもかゝる非難は不當である、何となれば感覺は二つの因素、即ち感覺する主體と感覺せられる對象との結合から起るものであるから、兩者に對して相對的な關係を有つてゐる。從つて兩者の何れか一方が變化すれば感覺も亦變化せざるを得ない。同一の葡萄酒も病めるソークラテースには苦く、健康なるソークラテースには甘く、感覺せられるかも知れないが、それは病めるソークラテースと健康なるソークラテースとが異り、從つて味はれる葡萄酒に對する關係が異なるからである。故に病めるソークラテースにとつては「苦さ」が健康なるソークラテースにとつては「甘さ」が眞である。二つの運動の結合の瞬間に生起する味覺そのものは、何れの場合に於ても、依然として眞である。故に如何なるものも相對的にのみ、それがあるところのもの——否寧ろそれが成るところのもの

のと成るのであるから「私にとつては私の感覺が眞なのだ——と言ふ譯は、私が感覺するどの瞬間にも、それは私の存在に相對的であるから」(280) 従つてその人の感覺のみが、その人に存在するものに就いても亦存在しないものに就いても、それを「判斷するもの」(*aporiai*) (*ibid.*) である。従つて感覺は無謬であるから、また知識でなくてはならぬ。このやうにしてプラトンは、ヘーラクレイトスのプロータゴラス的學說によつて、知識は感覺であると言ふテヘアエテイトスの第一の定義に基礎を與へた。

(未完)

- (1) Meno, 76 c—d, *メノ* は色を對象からの「流出」(*ekkyklosis*) となし、これをゴルギアス及びエムペドクレースの説となして
 280 Timaeus, 45 b—46 a, 59 d, 67 c; Philibus, 33 d f.